

『安全保障の位相角』序章&一章

序章

二項対立という思考枠組み

- ・ 冷戦期における日本の外交・安全保障の議論は、国内・国際政治におけるイデオロギー対立を反映して二項対立の思考枠組みで行われることが多かった
- ・ 55年体制の崩壊、冷戦構造の解体を経て、国内・国際政治の環境が複雑化している現代においては二項対立の思考枠組みが成り立たない。
- ・ 依然として日本の外交・安全保障に関しては二者択一的な議論が行われている。

二項対立の思考枠組みの呪縛

- ・ 現実主義と理想主義は本来対極的な主張ではなく、現実主義／理想主義という二項対立は成り立たない。
- ・ 日本の安全保障をめぐる議論は、「左右に分極化してまじわらないまま、思考停止の行き詰まりが続いている」
- ・ 日本の現実主義者が思考停止に陥る理由は、「ある政策を否定すること」に存在理由を見出しているため。

二項対立の思考枠組みからの脱却

- ・ 現実を「可能性の束」として試みるのが重要である。すなわち「現実というものを固定した、でき上がったものとしてみないで、その中にあるいろいろな可能性のうち、どの可能性を伸ばしていくか、あるいはどの可能性を矯めていくか、そういうことを政治の理想なり、目標なりに、関係づけていく考え方、これが政治的な思考法の1つの重要なモメントと見られる」
- ・ 「可能性の束」によって「思考の相対化」「思考の活性化」「現実の問い直し」という3つの効果が得られる。
- ・ 位相角の概念を通じて同じ効果が得られる。

議論の布石

- ・ 二項対立の思考そのものは、政治の役割を示してくれるという点で極めて重要である。二項対立の図式を破壊することは、本来緊張関係にあるべき事項から緊張を覆い隠すという危険性がある。
- ・ 二項対立は問題を単純化するために、「思考の相対化」「思考の活性化」「現実の問い直し」ができない可能性がある。
- ・ 二項対立の図式を破壊することで中道もしくは中間の立場に光が当てられるが、これは元の緊張関係を解消するものではない。

第1章 位相角をとらえる

政治的スペクトル

- ・ 他者とコミュニケーションをしない、すなわち個々人が相互作用しないと考えたとき、独立した個人の政治的傾向は正規分布をとる。(図 1-1)
- ・ 他者との相互作用が存在し、議論(コミュニケーション)を通じて他者を自分の主張の側へと「説得」

するような場合を考える。急進的な政治スペクトルを持っていると「説得」されにくいとする。この条件下では図 1-2 のような 3 つのピークを持つような分布となる。

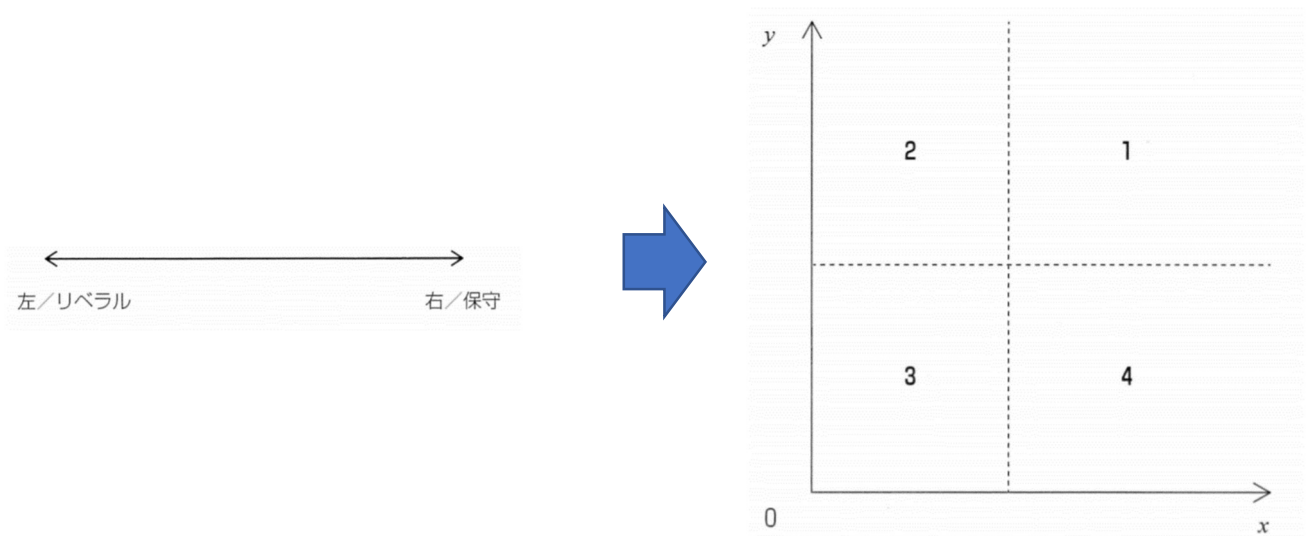
- ・ 実際に表れるピークは図 1-3 のようなものだと考えられる。中道にピークが出現しないのは他者を説得するような理論的・政策的な材料がないからだと考えられる。

「保守」と「リベラル」の硬直

- ・ 二項対立の図式においては、互いに逆張りを繰り返すことで動的な平衡状態を維持している。

「位相角」の考え方

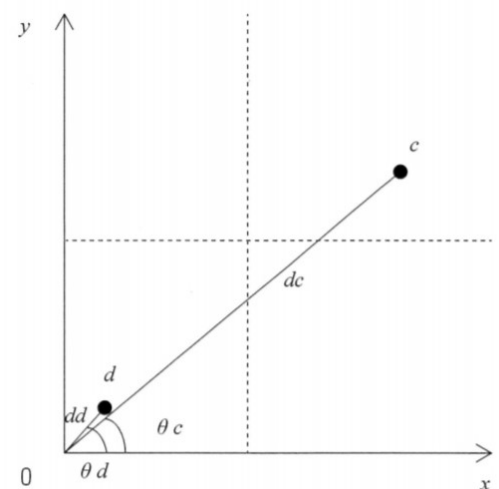
これまで一次元で考えていた政治的スペクトルを「折り曲げる」イメージで二次元化する。



x を「ある人の主張に含まれる右的な主張の強度」とし、 y を「ある人の主張に含まれる←的な主張の強度」とする。一次元空間で表現できていたのは二次元空間における軸上の点のみであり、特に中道に関しては一次元空間では決して表現できなかった第 1 領域が加わることになる。

右の図のように距離 d と位相角 θ を定義する。距離 d に大きな差があったとしても位相角に大きな違いが無ければ、合意可能な幅も大きいと考えられる。

二次元化によって折衷主義とは性質の異なる第 1 領域と他の領域との親和性が高い第 3 領域が可視化される。



疑問点・議論したい点

1. 「可能性の束」の定義がよくわからない。当たり前のことを言っているだけでは？
2. 「二者択一の思考を超える試みは、場合によっては、本来緊張関係にあるべき事項から緊張を覆い隠すという危険性」があるとはどういうことか。緊張関係にあるべき関係とは？二者択一を超えとなぜ「弛緩喪失」をもたらしうると考えられるのか？
3. 図 1-1 や図 1-2 は本当に妥当か？（あまり本質的な問題ではないが）
4. 何故逆張りを繰り返すのか、何故斥力相互作用が働くのか
5. 二次元空間の軸の定義はこのままでよいのか